小田原史談

第114号
発行所　小田原史談会
小田原市南町2-3-21

中野敬次郎 執筆
後北条氏秘話 (18)
小田原北条氏の全盛期を築いた陰の女性
香川 政治 載録

㈢機婦の図物語

この瑞渓院の家庭教育について、一つの挿話がある。

湯本の早雲寺に「機婦図」または「機織図」と呼ばれる双幅の狩野派の名画が伝わっている。絵柄は二軒の田舎家に、数人の敞衣の婦人達がいて、糸をつむぎ絹布を織っている姿を描いたものであるが、昔からこの絵は、瑞渓院が、子供達の教育のために、貧しい農婦が機織をする苦労を描かしめ、これを常に部屋に掲げて、子供達の華美をいましめた教訓画であると伝えられている。

寺伝は狩野法眼元信の筆と伝えているが、故辻善之助博士は、狩野玉楽の作でないかと言う。

辻博士の「日本文化史」の中から、これについて引用して見よう。

「室町時代さほど世に知られぬ芸術家で、各地方にいて相応にその地方の文化を飾った者も少くないであろう。

小田原に於ける狩野玉楽の如きはその好例である。

北条氏康、氏政の画師で画風はすこぶる元信に似ている。本朝画史にその秀逸にして印なきものは、世人誤って多く元信となすと評している。早雲寺所蔵になる元信筆と伝う機婦図は、その画風に元信に酷似しているけれども、似て非なるものがあり、恐らく玉楽の筆になるもので、北条氏康あたりが、その子弟を教訓するために、百姓、工人の耕織の労苦の状を描かしめたものではあるまいか。

若し然りとすれば、氏康の趣味等もうかがわれると同時に、その教育に意を用いた様子も知られるもので甚だ興味あるものである」と記述しておられる。

辻博士は恐らく寺の所伝を聞いて書かれたのであろうと思うが、氏康当時に子弟教訓として用いたのであろうと述べているのは面白い。瑞渓院が書かせたか、氏康が描かせたか、何れでもよいが、彼女も玉楽に学んだに違いないから、寺伝のように瑞渓院が玉楽に依頼して画かしめたものと考えた方が至当であろう。明治六年（一八七三）の夏、明治天皇が皇后（後の昭憲皇太后）とともに箱根宮ノ下の奈良屋旅館に避暑においでになったことがある。

この時湯本温泉の福住楼主人福住九蔵こと号正兄が、二宮尊徳の高弟の一人として名あり、歌人としても有名で、湯本を中心に箱根の開発にも業績の大きい人物でありながら、十一人の子供を持ち、しかも夫婦子供皆健在であるのを皇后が聞召され、御自ら福住旅館に御成になり、夫妻と子供を謁見されて、おほめを賜わった。その時のこと、正兄翁から、北条氏康とその夫人瑞渓院との間に一腹十二人の子供があり、しかも夫人がその子供達を立派に教育したことをお聞きになり且つこの機婦図の由来を言上すると、陛下はいたく感動遊ばされこの画を早雲寺より借用されて、久しく宮中の青山御所の一室にお掛けになっておられた。のち皇太后の崩御後に絵は寺に御返還になったという由来がある。

さて北条氏康は天文十年（一五四一）二十七歳のとき、父氏綱の病没の後をうけて北条家三代の太守となったが、元亀二年（一五七一）五十七歳で歿するまでおよそ三十年間関東の覇者として東奔西走し生涯三十六度の合戦をしたという。

この間瑞渓院は、小田原城内で留守居役として家を守り、多数の一族子女を薫陶教育して、夫君氏康を後顧の憂いなく活躍させた。誠によき妻であり、よき母であった。

㈣瑞渓院の崇仏事業

現在小田原市内に瑞渓院を中興開基とする寺院が三カ寺ある。

◎臨済宗　東光山願修寺（小田原市谷津）◎曹洞宗　大雲山興徳寺（小田原市板橋）◎曹洞宗　如意山善栄寺（小田原市栢山）でこのうち願修寺は夫人の歿後にその子の四代氏政が生母瑞渓院菩提のために、古い寺院を再興して生母を中興開基としたものであるから、瑞渓院自ら建立した寺ではないが、興徳寺と善栄寺とは夫人自らが再興に力をつくして成しとげた寺院であった。

この頃、北条時代を通じての西湘地方の曹洞門屈指の名僧というべき人に、悦叟宗忻和尚というのがある。

北条氏康夫妻は深くこの僧に帰依して、常にその活動を後援したが、特に夫人瑞渓院は宗忻和尚と力を併せて栢山の善栄寺を再興したのは著名な事実である。

元来善栄寺という寺院は鎌倉時代の初めに木曽義仲の愛妾であった巴御前の創建になった、という伝説の寺院として知られている寺であるが、創建当初は律宗であった。南北朝時代から臨済宗に転じ、北条時代になって曹洞宗となるのである。寺地も酒匂川の洪水の厄をうけて移転し、北条時代の頃はさしもの名刹も大いに衰微していたのである。

瑞渓院は、善栄寺が巴御前という著名な女性によって創建された歴史を持つのに、いま廃寺同様に荒廃しているのを見て、女性である瑞渓院はその衰頽を歎き自ら私財を投じて大寺院を再興したのであった。そして天文二十二年（一五五三）伽藍の新築が完成した時、かねて帰依していた悦叟宗忻和尚を講じて宗派を曹洞宗に改め、開山第一世としたのである。それ故、その法脈をかかげて以来四百年の今日に至っている。

興徳寺は、もと大雲軒といった古寺で、小田原城下の名僧というべき人に、悦叟宗忻和尚というのがある八段畑（小田原市栄町四丁目）にあったが、宗忻和尚が若いころ住んでいた寺であった。大永五年（一五二五）に二代北条氏綱の援助によって谷津の地に移り山寺号も大雲山興雲寺と改めた。だが宗忻は谷津には五年しか住まず、足柄上郡塚原の玉峰山長泉院や大住郡日向の（伊勢原市）の石雲寺などの住職を歴任していたので、小田原の興雲寺の方は衰えていた。そこで

氏康夫人がここにも私財を投じて再建することになったのである。

当時宗忻和尚は石雲寺にあり、氏康夫妻は使者を数回にわたり和尚のもとに走らせて興雲寺入りを要請した。和尚もその願望もだし難く、再び小田原城下に帰って興雲寺住職となった。そこで同寺は宗忻が中興開山で氏康夫人は中興開基となっている。今は小田原市板橋にあるが、これは江戸時代に稲葉氏が、寛永十年（一六三三）の大地震後の城下町整備にあたって現在地に移したのであって、谷津にあった頃はなかなかの大寺院であった。

(五)瑞溪院の墓所

元亀二年（一五七一）十月三日、北条氏康は五十七歳で卒去した。ところが、この氏康の死去については「小田原記」ほかの記録と墓碑と記載との間に一年の狂いがある。「小田原記」は

「元亀元年秋の頃より、氏康御病気にて、種々御療治ありと雖も、更にその甲斐なく、日々に重らせ給う箱根山の別当、国府津の護摩堂、花の木の蓮乗院にて百度の御祈念、そのほか方々の御立願ありしかども、定業や来りけん、元亀元年十月三日御年五十六歳にて御逝去あり」

と記しており、これと一連の書物である「鎌倉九代記」にも、また「関八州古戦録」にも氏康の死去を元亀元年庚年十月三日、年歳を五十六歳としている。

しかし高野山高堂院に伝わる「北条系図」にも、湯本早雲寺の墓石銘にも「伝心庵過去帳」にも元亀二年辛未十月三日とあるので、一応後者を正しいとして算者は元亀二年、五十七歳説を採るが、北条氏康ともある人物の歿年と年齢とに一年の差のあることは誠に残念である。

これと併せて注目されるのが、夫人瑞溪院が同元亀二年十一月二十一日に死去していることで、没年齢は五十歳か五十一歳であった

いまだ老齢とも言えないのに彼女の死が夫君の死とあまりに日が接近しすぎ、また夫君氏康の丁度四十九日の命日に当たっていることから、亡き夫を慕ってその命日に自ら後を追ったのではなかろうかという瑞溪院殉死説も時々顔を出してくる。

諡名は瑞溪院殿光室宗昭大姉といい、北条家五代百年を通じて、女性中最も華々しい幸福な生涯を送った人であろう。

ところがこれほどの人でありながらどこに葬られたのか、現在その墓所が明らかでないのである。

北条氏の菩提寺は湯本早雲寺で、同家の代々の当主と正室とは同寺に葬るのがならわしである。

北条時代の早雲寺には塔頭子院として南陽院（早雲後室菩提寺）、養珠院（氏綱室菩提寺）黄梅院（氏政前室菩提寺）があって、初代、二代、四代の正室の菩提寺が営まれているのに、何故に三代氏康夫人瑞溪院のものが早雲寺に最初から存在していなかったのか。

それはその子氏政が瑞溪院を特別に扱い、別に一寺を建立してそこに葬ったためであろう。その寺が願修寺である。

願修寺は江戸時代から明治初期までに衰頽の一途をたどり、古記、資料は殆んど失われて、いまは寺らしき堂もなく、粗屋の中に一軀の木彫小仏像と瑞溪院位牌が、厨子もなくむき出しで置かれてあるのみで、寺院の由緒も詳しくはわからなくなっている。だが「相模風土記」によると、応永の頃雲岩眺によって開山された寺院であって、北条氏政が中興し、実母瑞溪院を中興開基としたもので、もと小田原城内にあったが、稲葉時代に現地に移ったということが記してある。

前記したように氏政は、実父氏康のために早雲寺内に塔頭子院大聖院を、前室のために同寺内に黄梅院を建てたが、実母に対しては早雲寺内の塔頭式のものでなく特に独立の立派な願修寺という菩提寺を、城中に営んで供養したのは、それだけ母に対する恩愛の念の切であったことがわかる。従って瑞溪院は早雲寺に葬られたのではなくて、願修寺に葬られたのであろうが北条時代に城内にあったという位置が全く不明であるから谷津の現願修寺を頼り所として調べるより方法がない。たまたま、筆者は幕末の小田原藩士三浦義方の書いた「相州雑誌」に

「北条氏康公御室墓所、入谷津願修寺山内ニアリ、五輪」

という記事があるのを見つけ、大いに喜んで早速願修寺に訪ねて行ったが、寺の姿は前記したような次第であって墓所もなかった。

「相州雑誌」の記事によると、幕末までは同寺に存在していたことが事実であるから、附近を種々調査をして見たが知れず、いつ如何ような次第で失われたものかも不明であった。

しかるに、その代わりと言うべきか、第二の墓所が彼女の復興した栢山の善栄寺で見つけることができたのは望外のよろこびとも言うべきものであった。

善栄寺は、二宮尊徳一家の菩提寺で墓地には尊徳を初め一族の墓石があり、筆者はその調査で度々行って調べていた。或る時、本堂の側にある墓地の北側の隅に、他の新しい墓石にはさまれて、しかも墓石の裏面を通路に向けて建っている古い墓石が一基あるのに気付き、不審に思って調べてみたら、それが瑞溪院の墓石であるので一驚した。形状は簡単な宝篋印塔で、基壇を欠き、相輪も不備で、高さ一尺四十四㌢ある。

長い間に碑面が風化し彫銘の文字も読み難くなっているが、よく読んで見ると次のように彫られてある。

（表）瑞溪院殿光室宗照大姉

（側面左）元亀二末年十一月二十一日

（側面右）小田原北条家三代氏康公廉中

（裏）従天文二十三寅年曹洞宗ニ改也

とある。善栄寺も瑞溪院の再建した寺院であるので夫人の歿直後か、歿後遠からざる時期に供養のために築いた墓石であると思われる。瑞溪院は同寺の再興を機に改宗をしているが、その天文二十三年（一五五四）を明記しているのも貴重な資料といえる。

小田原北条家の女性でその名を知られ、また記録に残されている人は非常に多いが、何と言っても瑞溪院は戦国乱世の時代に稀に見る幸運にして多彩の人生を終わり、しかも優れた人物であるという点において、北条氏女性の代表者であるので、せめて墓所だけはしっかり残っていて欲しかった。願修寺にあったと思われる本堂が失われたのは惜しいが、第二の墓所があらわれたのはせめてもの喜びであった。

小田原市はこれを重要文化財に指定して永久保存の処置をしたのである。墓石は今は本堂前に移してある。

北条文化小田原から

江戸に移る（上）

(一)延長五里に及ぶ雄大な大外郭

小田原城の大外郭は、小田原の総曲輪、総構、総堀などといわれて、関東、東海の諸城をはじめ、西日本

でも姫路城、岡山城などまでこの形式をならって城修理をした程に有名なものである。これは北条時代に氏康、氏政、氏直の三代に亘って築造せられたもので、殊に豊臣秀吉の攻撃に備えて、天正十七年(一五八九)の暮から翌十八年の春にかけれ大増築し、最終的に完成した不落の堅城である。その大外郭は小田原城下町を完全に囲繞する延長五里(二〇キロメートル)に及ぶ雄大なものであった。

永禄三年(一五六〇)には上杉謙信、永禄十二年(一五六九)には武田信玄と、両雄の小田原域攻めに対し、北条方が籠城作戦を全うして、これを撃退させたのも、天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉の小田原陣で十五万の大軍により百日間の攻撃を受けた際にも、力攻ではついに落城せず、攻略で降服せしめたというのもこの大外郭が存在したためだといわれる輝かしい経歴を持った大城壁であり、本邦築城史上の一異彩であった。

ところが、慶長十九年(一六一四)一月、徳川家康が大破却を行って、この大外郭の価値と面影を消滅させてしまった。それは如何なる理由によるものであろうか。

慶長十八年と言えば、北条氏滅亡後二十五年であるが、すでに家康は天下を取って将軍となり江戸に幕府を開き、後に二代秀忠に将軍職を譲り、自ら大御所と称して駿府城(静岡城)に在城している時代である。この年一月二十五日、小田原城主大久保相模守忠隣に突如改易を命じ、小田原城及び所領を没収、忠隣を流罪に処して身柄を近江国(滋賀県彦根城主伊井掃部頭直孝に預けた。時を移さず一月二十六日、二十七日の両日に亘って小田原城外郭の大破却を行ったのである。

忠隣の改易については諸説こあって、今以って真相が明確でないが、諸説の言うところいずれも一理あるように思われるが、突極としては二つの問題が考えられる。

一つは江戸幕府創設期の二頭政治の禍によるものである。江戸に二代将軍秀忠がありながら、駿府には大御所家康があってこれを後見しており、執政には将軍付、大御所付の二大老が存在するという二元性の政治が行われていたのである両雄並び立たずの古い諺の如く、二大老の大久保忠隣と本多正信の性格の相異からも、これは到底永く並び立つべきものではなかったそこでどちらに最後の軍配があがるかと言うことになれば、勿論大御所家康側ということになる。忠隣は秀忠に信任された程には、家康には寵愛せられなかったので、そこを本多正信の政策に乗ぜられたものなのであろう。

今一つ重要なのは大久保家と豊臣家との問題である

北条氏の滅んだときの小田原賜城の際に、秀吉が家康にすすめて小田原城を忠隣の父忠世に与えしめた事以来、大久保家は秀吉に特別の恩顧を受けており、忠隣がそれ以前天正十四年(一五八六)家康に従って上洛した際には、豊臣の姓を授けられ従五位下治部少輔に叙任されている。そのときの宣旨文は今も大久保家に残されていて、その案文には明らかに豊臣忠隣の名をもって叙任をうけている。その時に秀吉から贈られた盛光作「豊太閤送物太刀」も存在している。その他にも秀吉生前中に種々の恩顧をうけているので、秀吉没後も豊臣家に対して好意的で、西国筋の太閤恩顧の諸大名とも親近であった。

そこで豊臣家を倒そうと考えている家康からすれば忠隣の権勢をそのままにして置くと、恐らく太閤の遺言を破毀するに忍びないとて、大阪の秀頼を憐む態度さ示すであろう。それ故、このような豊臣恩顧の大名が関東に存在することは危険であるから、大阪城攻略以前に忠隣を処置することは己むを得ないこととして改易に踏み切ったものと思われる。大久保忠隣の改易奉書は、切利支丹弾圧の命をうけて京都にいた忠隣のところへは、一月二十五日手渡されている。しかし、留守の小田原の方では、これより先一月二十一日に老中安藤対馬守重信を筆頭に本田出雲守忠朝、牧野右馬允忠成、高力左近大夫忠房などが大勢の兵士をつれて城受け取りのために小田原に乗りこみ、留守居役の家老天野金太夫に即日城を明け渡すように強要して実行した。主君のいない小田原には全くの晴天の霹靂であった。城中、城外右往左往して未曽有の混乱を呈したが、幕府はそれを尻目に、二十六日二十七日に大軍をもって、小田原城総曲輪の大破壊を行ったのである。

そこでこの時より二十五年前の小田原戦役のときのことを考えてみると、秀吉の属将として従軍した家康は、小田原城外の東方今井村に本陣を置き、三万の軍を率いて東方外郭線や出城の藤曲輪を攻めて激戦をくりかえした際、総曲輪の存在に難渋をした痛い経験を持った人であった。それ故天下統一後の一地方城にこのような城郭が存在することは禍をもたらす危険のあることをかねて感じていたにちがいない。それが大破却となってあらわれたものであろう。

忠隣改易後まもなく、大阪冬の陣が起り、家康は遂に豊臣家の攻略を開始した

戦い半ばで講和をすすめた家康は、その条件として大阪城の外堀を埋めることを要求した。ところが工事完了と共に、和議を破って再び戦端を開いて夏の陣を起こし、遂に豊臣氏を滅してしまった。その外堀が小田原戦役直後に造った大阪城の総曲輪であったことに思い合わせると、小田原城外郭の破却は、大阪城攻略の一連のものであることが察せられ、忠隣の改易も、小田原城の外郭破却も、豊臣氏攻滅策の重要な事前工作であったものと考えられる。

久野川挽歌

—流路の変せんと周辺史話—

星野幸一

酒匂川堤から遠望する箱根連山は樹林が山肌を覆い美しい郷土の景観として私たちの心に焼きついている明神岳の背後には富士山が大きく顔をみせ外輪山は東へ向けて起伏に富んだ山すそを広げている。久野山は私たちの身近な山として親しみや温かみを感じさせるが四季の表情を見せる素朴なただずまいの中にもさまざまな歴史がつくられてきた。

明星岳山腹に源を発する船原川と塔ヶ峰山腹に源を発する坊所川(新編相模風土記稿によれば勝沢川)は留場で合流して久野川となり山ふところを出ると多古丘陵、星山丘陵にはさまれた田園地帯を一直線に貫流しているが後北条時代以前は星山から川端部落に至る田園は概ね直線で村の上手より左に折れて足柄小学校の北側を抜け市子橋のたもとから南へカーブして井細田八幡神社の前を流れていた。この流路は自然の水路

として先史時代から流れてきた久野川の原型である。

古代の原住民は久野川を生活用水源として狩猟や木の実食、原始農耕で生活の糧を得たものと考えられ万葉の東歌には

足柄の箱根の山に
　粟蒔きて
実とはなれるを
　逢わなくもあやし

と歌われ（作者不詳）婚約中の娘が防人などに徴発された恋人に会うことが出来ないのを歎いた歌といわれるが粟も農作物として食卓に上ったことだろう。

自然が荒れると農民は凶作に泣き当時活火山として噴煙を吐いていた富士山の爆発や降灰にも悩まされ、地震、旱ばつ。水害等の被害も受けたろうが食糧枯渇時の生活を乗切り久野山は六世紀から七世紀にかけて歴史の舞台に登場したのである。

小田原市発行の「広報おだわら第三八六号」に掲載された遺跡分布地図をひろげてみると遺跡は古墳、集落、墳墓、遺物散布地、遺物包含層等に分類され図上の遺跡番号を追うと諏訪の原周辺から多古丘陵にかけて古墳や遺物散布地等が群在し郷土史のルーツを示しているが、古墳時代やその前後の時代の歴史関係は不透明であり久野百塚や第一号墳等には一体どんな人物が眠っているのだろうか。

当時は大和政権による東国地方の侵略が進み地方豪族の抵抗や同化が想像される時代であり被葬者を土着或は外来の支配者と仮定しても大和政権との間には政治的従属関係が推理されるのである。地方豪族としては東征軍との遭遇が始めて異邦人、異文化と接した訳で見るもの聞くものすべてがエキゾチックであり言葉も通じ合わない光景が随所にみられ征服者も通訳はなく身振りで宣撫工作を進めたことだろう。

第一号墳の前に立てられた説明板には小豪族の支配者の墳墓と記されているが墳丘の位置や大きさを決めたのは勿論支配者自身であり死に先立って平野を見下す丘上に葬制の身分に応じた墳墓を築いて権勢を誇示し被葬者は之を眺め満足して遺愛の品々も副葬されたことだろう。古墳が豪族の存在を裏付け古墳の分布が大和政権の東国支配がその地方に及んだ証左とも云われるが従来の埋葬方式と異なる高塚式円墳がどのような経路を辿って久野山に築造されたかは知る術もない

大和朝時代は野蛮未開であった日本が遣随使、遣唐使、留学生、留学僧等の派遣や朝鮮、中国の渡来者から中国文化を吸収消化した時代といわれ、やがて仏教文化の影響を受けて古墳時代は終幕したが斑鳩の里や平城の都で東大寺、唐招提寺、法隆寺等国費による寺院が造立された頃、久野山では富士の噴煙を望みながら名も無い農奴たちが営々と封土を盛り上げていたのが対比されるのである。

富士山の噴火史によれば七世紀から八世紀にかけて熔岩の流出する爆発が二十年から四十年間隔で起り歌僧西行法師（一一一八年～一一九〇年）も

風になびく
　富士の煙の空に
消えてゆくへも
　知らぬが思ひかな

と歌って居り（新古今集）当時の富士山は噴煙を吐いていた。第一号墳も今日では樹木でおゝわれているが古代の農奴たちが汗と血で築き上げたであろうその偉容には驚異すら感じるのである。

古墳時代から約七百年の歳月が流れると中世の歴史は武士を中心とした戦国の時代であり群雄の相争うなかで北条、豊臣両武将の登場は久野川の流れや村人の暮しを変えてきた。

北条幻庵が久野に館を構えたことや太閤の小田原攻めに備える久野川改修、太田十郎氏房を久野川陣地の守将としてこの川をめぐる攻防が激戦となったこと等は久野川戦国史の主要なテーマであるが流域の村では戦争に向けて労役や民兵として住民の全エネルギーが投入されてきたのである。

当時の村の戸数や人口は定かでないが久野川の改修は村人に対する小田原攻めの予告であり戦いが始まれば村の男たちは北条軍の陣地に動員され村の民家は敵の陣屋として占領されたことだろう。

幻庵が久野に館を構えたことも地元の反響を呼び普請や造園に対する村人の出費や労役負担はさぞ大変であったと思われるが嘗て幻庵が文人と茶に興じた庵も影はなく中宿に現存する池や廟所が僅かに名残りをとどめている。幻庵は小田原落城の前年十一月一日関東覇者早雲の子として九十七歳の天寿を全うしたが、小田原攻めを予測していたので豊臣との一戦は覚悟の上でこの世を去ったことだろう。秀吉はその月の二十四日家康を通じて氏直に対し宣戦を布告した。

久野の地形は小田原城からみると死角であり城山と星山丘陵の蔭である。小田原城の視界から外れた久野山は攻撃部隊の集中分散には打ってつけの場所であったろう。防禦側からすれば多古丘陵と約二百米を隔てて流れる久野川は天然の要害であり城を石垣、堀、土塁等幾重にもめぐらせた縦深陣地の最前線となったのである。

北条氏は久野川を曲流させて側防力を固め敵兵が飛び越せない巾の深い堀割に改修して岸辺のボサの刈取りを禁じたという。多古丘陵から攻め下りてくる敵を至近距離まで誘きよせボサの中に配置した伏兵が一斉射撃で之を撃退する。この戦法は功を奏して敵の進撃を阻み大きな損害を与えたというが近接戦は凄じく井細田地区西の鈴木家はこの戦いの兵火によって焼失したのである。

私はこの話を近所に住まわれた士族の老人から先祖の言い伝えとして聞いたのであるが当時の戦闘場面が目に浮ぶようである。亦戦いを前に非戦闘員の老人、女、子供は諏訪の原総世寺に避難させたとも伝えている。

新編相模風土記稿によると久野川陣地は久野口から井細田口に渡る防禦線百八十間（約二粁）守将は、二十六歳の猛将太田十郎氏房（五代氏直の実弟、埼玉県岩槻城主）兵力は岩槻部隊を主力とする一万二千であった。

井細田村の地形は八幡神社の創建が天正十九年（一五九一）であるから目標物としての社殿や森はなく井細田口は小田原の北門であり城下町へ出入する虎口として足柄往還の起点であった。

位置は寺町広小路あたりで木戸門に番所を設け往還は井細田口を出ると寺院の集中する寺町を抜け久野川堀を渡れば陣が道への道筋である。敵の奇襲を避けるため道路を曲げて造ったのが陣が道と名付けた由来と云われるが久野川沿いの丸島や陣が道（井細田村の小字名）は激戦地であったことを伝えている。

一方久野山に集結した豊臣配下の大名軍は数万に達したと云われ、昼夜を分たぬ部隊移動で久野山の喧噪は想像をはるかに超えるものであったろう。

久野川陣地の包囲は上流の荻窪口から久野口は伊勢松阪城主の蒲生氏郷部隊、久野口から井細田口は尾張清洲城主の織田信雄部隊が多古丘陵に展開し井細田口から渋取口に至る間は今井村に陣所を築いた徳川家康軍が展開したのである。各

大名軍は宮城野から明神岳明星岳を鞍部を抜ける四ッ尾ルートを切り開いて山を越えてきた。

太閤の小田原攻めは天正十八年（一五九〇）四月上旬の第一次包囲総攻撃（四月四日）第二次総攻撃（四月七日）では突入に失敗、多数の死傷者を出したため四月九日韮山城攻撃中の部隊より二万五千の増援を得て第二次包囲完了後は味方の犠牲を避けるため兵糧攻めによる持久戦に変更、秀吉が六月二十六日湯本から一夜城入りして十日後の七月五日城は落ちたのである

徳川家康が四月三日湯本を発って諏訪の原に到着、四日今井村に移り柳川家に陣を定めたというがその日は小田原城の第一次包囲総攻撃が敢行された日であり諏訪の原からの進撃は眼前に敵の前哨陣地とみられる多古城があり位置は多古丘陵が東へ突出した先端部附近で規模は、新編相模風土記稿に東西に二町（約二百米）南北に四十間（約八十米）城主の名を伝えずと記され概ね小田急線以東の多古山に匹敵する広さである

城の北麓に天文三年（一五三四）に開山した天桂山玉宝寺があり山門前の説明板には裏山の尾根筋に中世構築の多古城址があり寺と浅からぬ関係のあることを記している。

山上に祀られた白山神社と玉宝寺の間には道巾約二米の稲妻形に曲った切り通しがありその中程から諏訪の原に向けてなだらな小径を設け城の陰路を思わせるこの辺りは地表を灌木が這って草いきれや樹液が匂っていた。多古山と切り通しと玉宝寺をセットすれば多古城の全容を考える上で風土記に示された規模と合致するが徳川家康軍が諏訪の原から尾根伝いに東進展開したというから多古城は久野川陣地と呼応して応戦する訳だが撤退したものか戦闘にまつわる史証や伝承を地元に残していない。

小田原藩主稲葉正則の時代（一六三四年～一六八三年）に域の外郭は田園に開墾したというからその頃に城址は消滅し相模風土記に名をとどめた多古城は残映すらなく幻と消えたのであろう。

玉宝寺は本堂内に江戸中期八代将軍吉宗の頃檀家の添田兄弟が造仏した木像の五百羅漢（一七三〇年～一七五七年、完成に二十七年を要した）が安置され現在小田原市の民俗文化財となっている。

黄金と極彩色が施された立像座像の御姿も今日ではかなりのくすぶりをみせて居り何時の時代か詠み人も知れず羅漢をたたえた御詠歌には

わがおやにたる
仏もあるらかん
まわりておがまん
たこの寺かな

と歌われ庶民が相州霊場としてこの群像（五百人の釈迦の弟子）の中に親の姿を探し求めようとした心が信仰となっていたのかも知れない。

江戸期の農村では薪、草萱、馬草等を周辺の野山から入手することが生活上重要な仕事であり久野山は数ケ村が入り込む入会地となっていた。山は未開であり野山には雑木林が点在したのである。

明治の中期入会地は関係町村が財産区として借受け一部は払下げにより郷土の先人が子孫の福利を念願して植林を始め明神岳（標高一一六九米）明星岳（標高九二四米）塔ケ峰（標高五六六米）を結ぶ東斜面は造林面積が九〇パーセントに及び林業収益と水防の役割を果してきた。

財産区では各町村より任期二年の議員を選任して植伐、林道の開発架橋、収益の配分等を管掌し小田原市では昭和五十七年五月坊所川上流に本格的な森林レクリエーション施設として、「いこいの森」が誕生したハイカーが喧噪の市街地を離れた森の中で自然の声に耳を傾け、のびのびした解放感を味わうのもさることながら森林が木材の生産だけでなく自然環境の保全に重要な役割を果していることを知ってもらうのも一つの目的であり、嘗て戦国時代に豊臣の大軍が押寄せ江戸時代の農民が草刈りに通った久野の奥路はキャンプ場として造成され夏期シーズンには野外活動のメッカとなって学生、子供会、青少年グループ等キャンプファイヤを囲む若者たちの合唱が谷間に谺していくのでおる。

星山地区の「おさん河原」も江戸期以前は「うさぎ河原」と呼ばれ古代には野うさぎの生息地であったのかも知れない。

大正期に入って紡績業界の隆盛期には大正六年井細田に小田原紡績工場、大正八年川端に日加工業小田原工場が建設され関東大震災後の大正十四年には大雄山線、昭和二年に小田急線が開通、田園地帯を二社の鉄路が快走して久野川平野は近代化の夜明けを迎えたのである。

大正七年に終結した第一次世界大戦前後のヨーロッパでは繊維産業が軍需産業に転換したため繊維生産が加速度的に低下、欧洲綿製品は後退して日本の綿製品が世界市場へ進出する好機となったが、私たちも大東亜戦争（一九四一年～一九四五年）を通して戦争が始まるとすべての産業が軍需優先となり「欲しがりません勝つまでは」の戦時標語と共に銃後は生活物資の欠乏を体験した。

昭年の初期には農業経営合理化のため「あさん河原」から井細田、山王原に至区間の耕地整理が実施され新設された人口水路の久野川之に並行する道路は流域の大動脈となってきた。耕地整理を実施するために組合が結成され委員は関係官庁、地主、建設業者との交渉、工事費の割当、集金、積立等の雑務を奉仕したが田園地帯に水路、道路の新設用地を確保するためその合計面積に対して旧久野川水路を含めた農地の交換分合が行われ縄延び分は売却して区劃、畦畔、溝渠の変更、灌漑設備を改良したので小田原城攻防の歴史を秘めた久野川は消滅し八幡神社前の堀割が旧水路の名残りをとどめている。

大東亜戦争中の昭和十九年（一九四四年）七月には軍需工場の疎開で久野山中に三国製作所小田原工場が建設され戦後昭和二十三年（一九四八年）五月には日本専売公社小田原工場が完成して久野地区にも大工場の進出をみた。

耕地整理後、久野川河畔に植えられた桜の苗木も何時しか大樹に育ち春にはのどかな田園風景と水路に舞い落ちる花ビラが久野路の慕情を誘ったが昭和三十年代にはモータリーゼーションによる自動車の大衆化時代を迎え交通量が増大したため河畔の桜並木は全部切倒され道路を拡幅舗装してセンターラインもつけられた。只両岸の石積みされた護岸がコンクリート製と異り僅かに風情をとどめている。

昭和三十三年川端地地に小田原市立病院が建設され閉鎖された日加工業小田原工場の跡地には印刷工場やスーパーマーケットが進出田園地帯は大雄山線から小田急線を越え久野山に向って開発が進み、昭和四十五年六月に決定した市街化調整区域は線引きの手直しを迫られている。

高架の厚本バイパスが久野川を越え高層マンション県立小田原労働センター、バスターミナル等も軒を列ね久野川の新しい顔が出来て景観は一変したがその間

農薬、生活排水、工場排水等の流入で汚染は進み、不燃焼物の不法投棄により川辺や川底までが汚れ昭和四十年代には魚も棲まない死の川と化してしまった。

当時は生活公害が全国的にクローズアップされた時代で工場は県や市の行政指導により排水処理施設を設け一般家庭も都市下水の普及で川の水は徐々にきれいになってきた。

河川の復権を目指す住民運動として昭和四十九年には「山王川、久野川をきれいにする会」が結成され、毎年六月の環境週間には流域自治体、県、市が協力して川辺の除草や川浚いを行い稚鯉が放流されたので今日では体長五、六十糎に育ち街中の川を大鯉が泳ぎ水がきれいになった故か鮎の天然溯上もみられ釣糸を垂れる太公望を散見するのである。

江戸以来の自然を残してきた久野川流域は二十世紀後半に工場や住宅地帯に改造され今後どのように変貌するかは未知数だが、川が地上から姿を消し道路やビルの下に埋没すれば久野川の自然は消滅して歩道橋の下は車の洪水となり大気汚染や騒音のはげしいビルの谷間となるだろう。

地域の開発も住民の自然保護と環境保全運動がバネとなり環境や公害という言葉が市民権を持つ時代に推移してきたが、菜の花やれんげ草の咲き乱れた田園、麦畑の雲雀、水田の蛙野道の堇や肥溜めを嗅ぎ草いきれを浴びた遠い日の久野路が懐しく、古墳時代から中世へ江戸時代から近代へと流路の変せんを経てきた歴史風景の中に郷土の挽歌を聞くのである。　（了）

昭和五十八年三月

五十年目に咲いた蓮の花

朝倉　修一

春の彼岸を迎えて、陽足も延び一雨毎の暖かさの中で木々の芽も蕾もふくらみを見せている、今日。

小田原城跡のお濠の水も温み　水や沼の中で、地上以上の活発な成長をして、水面近くまで伸びてきており皆様に願見せも間近となりました。

昨年　美事に咲き競い楽しませ喜ばせてくれた、ヒメヒシや水蓮、小田原古来の蓮も秋には破蓮となりて残がいを市の方達がきれいに取り去った。藤棚や大濠に亦、三年目の姿を観せてくれることだろう。シンガポール産の紅や白の美しき水蓮と、古代ロマンを秘める一千数百年前の古墳の中にありし一粒の種子により咲いた蓮の花、大賀蓮の妖しく咲き乱れる藤棚の濠に夢か……。古代の美女の遊ぶ姿を偲ぶとき……。

小田原城跡二の丸の大濠に五十年目に咲いた蓮の花数輪。

白き隅櫓と赤く映える住吉橋の下に。

なお濁れる大濠に青く黒く重なりて萠えいずるヒメヒシの群生。

冬眠より目覚め、昨年四十年ぶりに発芽して二年目を迎える。

眼鏡橋南側の濠には、実生より目覚めた蓮の若葉が風にひるがえる。住み心地好さそうに重なりて開く。

恥かし気な姿をなして綻び匂う小田原の蓮の花「緑と水の豊かな住みよい都市」の気候と自然に恵まれた、我が街のシンボルである城跡の濠が長年に亘るヘドロと塵芥と微生物の堆積によって腐敗して、メタンガスの発生によって悪臭はなはだ強く、まるで死んだ濠であった。

市制四十年を期して、大がかりな清掃工事に着手、多額な予算を掛けた泥浚いを始めた。大きな近代的機械が水の中に入り、篩で掻回し、太い管で吸い込み、キャタピラーで掻回し、約40cm位のヘドロを取り去った事により、実や根、種子の固い外皮に傷がつき、又は潰された蓮やヒシの実が酸素の吸収が活発に働き、陽光が深く差し込み、水温が上った……などの三つの大きな理由で40年～50年の冬眠より目覚めて、昭和五十七年三月、一挙に発芽の群生が見られた訳で、発芽二年にして大濠の約半分を埋めつくして、その成育ぶりには驚くばかりで、更に懐かしき花の姿に接したのである。春が還元された事は誠に喜ぶべきことであり暗い世相の中の一灯と言うべきである。

戦後　幾たびか泥上げをした、手掘りでは何の変化もなかった。大賀蓮は種子の角を鋏で切って発芽に成功させた、大賀博士の名を取って大賀蓮とした。

小田原の蓮、ヒシは機械的刺激を与えた事が大きな原因と思う。普通は一年～四年が冬眠の間であり、まことに珍しき驚くべき生命力である。濁れる濠に、早川の水が流れ込んで、どの様に変化を与えてくれたのか。……

私が　一時に発生した理由を、ラジオで放送後、朝日新聞、毎日新聞に横浜国大のK教授は「あまりの発育の良さは種子でなく、根が残っていての発芽ではないか」との論を発表された。

ヒシはヒシ科で、オニヒシ、ヒメヒシ、ヒシの三つに分けられ、小田原のヒシは昔、四国の伊予より取り寄せたとの古書もあり、目的は刺が鋭く、二本と四本あって、城を守るのに役立つことと、食糧にもなり、街には〝ヒシの実売り〟が居て、商売をしていたこともあり、強壮剤としても、かなりの実績を挙げていたようでもある。

蓮の実も「はちす」といって、東南アジアでは珍重され特に中国料理には無くてはならない物のようだ。

水蓮は戦前、日本水産の熊田頭四郎博士（南町・32区）に永らく居られた人がシンガポールの植物園より分けて頂き、香港で一年越冬させて、小田原の十字町（今の保健所の所）にあった、日本水産研究所の水槽にあったのを、昭和二十三年三月、小田原生物同好会（会長・松浦茂寿先生）の同志が植えた13株中の3株が残っており、あまり株が大きくなり過ぎて、花の色も悪く、輪廓も小さく、見苦しき姿である。株分けも肥料もやらず、可愛想で残念である。肥料は「ミガキニシン」か「ボロ靴」でも良いのだが、思いやりと愛情が不足で、観光に価値付けているのに気の毒である

大賀蓮は、古墳のあった千葉県に　株分けを幾度か願ったが出来ず、小田原市役所の高杉課長の紹介で、川崎の篤志家より分けて頂いて植えたが、失敗を重ね川崎より出張して頂き、条件に合せて植え直し、「ミガキニシン」を根元に施したことが、今の発育の原因と思われる。

観光客にも、市民の皆様方にも良く理解出来る様、親切な説明書の立看板を立てたらどうだろうか。史談会の皆様方の浄財で。！

大賀蓮の隣りに、他所から迷い込んだか「ミヅカンナ」が渋い味を出して咲いている。皆様方の朝夕の散歩の折や、学校にも近いので、子供達の研究に両蓮とヒシの観察を願いたい。

梅雨明けて
浮葉に風の立ち騒ぐ
古墳より
いでしはちずの今開く
城濠を
風わたりゆく大賀蓮
大賀蓮
古代の色にふれて見し
茎長く
空に開きし蓮の花

環翠楼の自家用発電所

川瀬速雄

栢山の青木秀司翁より史談の一助になればと、環翠楼自家用発電所の説明書と建設工事の記録写真を戴いた。箱根史談と云うべきかも知れないが、小田原に無縁でもないので投稿いたします。

自家用環翠楼鈴木発電所説明書

一、沿革

現在発電所附近は広範なる面積に渉り企業者の所有地にして、箱根山中にても有名なる神代杉の発掘地として知られたる所なり。

大正八年六月以来環翠楼鈴木の増改築に使用するため此の地に於て神代杉の採掘をなしつつありし時、同年八月視察のため梅村美誠氏此の地に来り其附近をも視察したるに、偶其所が水力利用に適切な地勢なるを発見し之を電力として塔の沢に送電利用する決心をなし、帰宅後直に、当時横浜電気株式会社塔の沢発電所長たりし工学士戸原与四郎氏に図りたるに、大に此の挙を賛せられ翌日直こ測量機械等携帯の上実測し、同年八月二十八日、鈴木英雄氏及び梅村美誠氏の名義を以て主務官庁に出願、翌九年九月三日付けを以て水利使用の許可を得たり、之より前、戸原工学士は北海道水力発電気株式会社の技師長として栄転せられ、後任として工学士前田滋樹氏赴任せられ本計画も前田工学士に引継ぎせられたり。

水利許可せらるるや九年十月前田工学士の紹介によりて、浜田利三郎、新倉但今村静雄の諸氏の分担のもとに電気工事設計に着手して、送電線の測量及び設計、材料購入の手配を定む同月水車及び発電機を決定し、飯田邦彦氏の紹介を以て芝浦製作所及び電業者へ夫々註文書を発せり。十一月末には已に送電線用電線等着荷せり。大正十年一月十一日を以て自家用電気工作物施設の申請をなし、同年七月十六日付認可を得たり、此に於て工事着手の準備全くなりたり。

即ち今村静雄、専ら工事現場を担当することとなり同年十月発電所及び附属の建物の工事に着手し、年内に堰堤工事を完成せり。

厳冬の候、一、二、三月中は一まず工事を休み其の送電線路不足材料等調べ、五月末電線路を完成す、進んで水力工事、水圧管布設機械器具の運搬据付け等工事進行に努め、本年十月を以て竣工せる次第なり。

二、起業の目的

箱根塔の沢環翠楼鈴木の電化を試み惹ては社会に聊か利せんとする目的を以て企画せるものなり。在来の薪炭を廃して電熱を利用し電灯も燭力を倍加して最新の電球を使用す、其の他製氷工場をも設けて盛夏の候は納涼用にも此を用ひんとし、或は製材の用に供し、其の他余力を利用して極力文化的施設を行はんとす、大正十年十月の起工より本年十月に竣工して、満一ヶ年の日子と、総延人員七千人及び総経費七万円余を以て完成せり。

三、位置

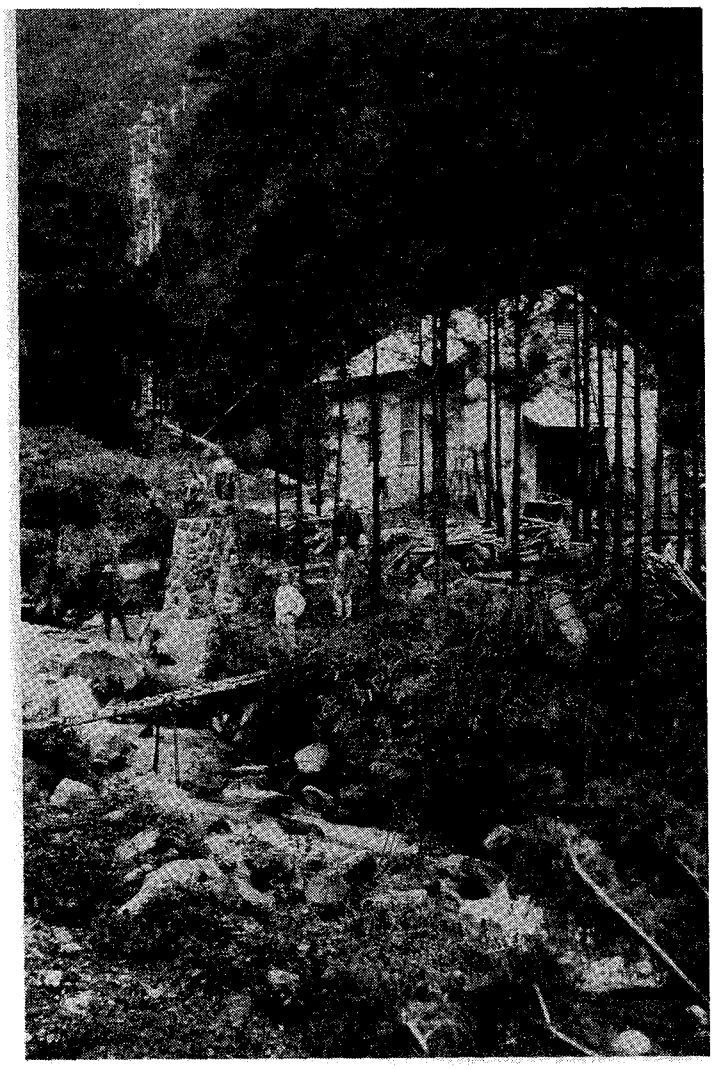
当発電所は旧東海道畑宿より約七町山中に入るたる滝坂字日影嵐にあり、芦の湯温泉は此処より約二十町の山上にあり、温泉に源を発したる滝沢川は途中有名なる双子山の裾を通過して飛竜の滝となり漸次水量を増し、常に毎秒五立方尺の流量を有し四時の変化少なし、なほ水源地方の植材事業が完成の暁には益々有望なるものと確信す。

本流は飛竜滝に到るまでは殆んど平地なるも滝の下流は勾配急にして小なる滝の連続の状態を呈し、其の間岩石点々として散在す。

四、工事の概況

取入口を滝の下流約百間の所に設置す。其より地勢上水路を設けずして直に水圧鉄管によりて発電所に送水す、故に落差の割合いに水圧鉄管の延長比較的大なるも全然水路を設けざるが故にこの保守費を減じ運転費を節約し得たり。

此処に於て発電せられたる電力は、三相三線式、三千三百ボルトの高圧により湯本村大字上草苅及び火燈山を経て途中唐滝の沢等、大小二、三の沢を越えて湯坂山に至り丸山に出て里道に沿ふて塔の沢に到り、柱上変圧器によりて低圧百ボルトに低下し構内に引き込む、此の距離三里余あり、電柱総数百二十六本、是に保安用電話線を添架して送



工事中の発電所

電上の打合せに便せり。

五、発電設備概要

出力最大百二十馬力、電力八十五キロワットを得る計画のもとに機械器具の設備をなす。

取入口水面水圧鉄管との落差　二八〇尺六寸

水圧鉄管中にての損失落差　二〇尺六寸

有効落差　二六〇尺六寸

水圧鉄管の長さ条数。一条　一一七三尺

水圧鉄管凡て軟鋼製、リベット綴、フレンジ接続とし、パッキンは厚さ二分の鉛板を用ふ、水圧管内の流速は毎秒五尺以内として断面積を算定せり。

水車。東電電業社原動機製作により下記格定通りのものとす。

種数　ベルトン水車、シングルホキール、ダブルシェット。

出力　百二十馬力。

回転　一分間に付き六〇〇回転。

個数　常用一基。

水車は十五個のバケットを有し、各ボールトにて堅固に取付けられ将来の取換えに便ならしむ、水圧鉄管よりストップバルブを経たる水は二分とし、ニードル式水量加減装置によりて、バケットに打付け回転を起すものとす。

調速機　同社製にして自動油圧装置とし、オイルポンプ及び速度調節器を具備し、なほ手動式装置をも併用す。一度自動装置に移すときは荷量の増減により自動的にノッズルの開閉を司り以て常に同一回転数を保持する、レリーフバルブを備へノッズルの開閉に伴ひ自動的に動作せしめ依って鉄管内の水圧の非常昇騰を防止する。

発電機　発電気及び附属電機は凡て東京芝浦製作所製とし、次に記すが如し。

種類　回転田磁型、交流三相三線式Y型接続、三三〇〇ボルト、一〇〇キロボルトアンペア、五〇サイクル、六〇〇回転毎分、フレキシブルカップリングにより水車軸に直結す。

励磁機　種類　インターボール付直流複捲発電機一一〇ボルト、四キロワット、六〇〇回転毎分、発電〇軸に直結す。

配電盤及び附属器　配電盤は大理石製とし、油入自動遮断器付き開閉器及び送電上必要なる計器及び調整装置を有す。避雷の目的を以てチョーキングコイル及びマルチギャップアレスターを併用す。

送電線　電柱はすべて杉柱にして長さ二十八尺、末口五寸のものを主とし、特殊の場合は末口六寸、三十二尺のものを使用す。腕金は特殊の設計により、電線は正三角型の各頂点に配置せられ、線間距離は各二尺とし風圧によりて線間短絡を絶対に予防す。

電線　B～4番線を用い此を支持する三重碍子は頸部以下を赤色となし高圧電線路の標識となす。地勢上本線路は冬季は雨雪のため夏季は雷災及び暴風雨のため被害多かるべきを予想し電線は硬銅線を用い、架線に際して施度は充分なる安全係数を取り、なほ支線を増して此等障害のために備へたり。

電話線路は電力線と四尺の間隙を取りたるも、なほ誘導作用による通話障害を可及的少なからしむる目的を以て、電力線は電柱三十本毎に、電話線は電柱十本目毎に、トランスポジションを行いたり。

大正十一年十月。

工事担当者　今村静雄

青木秀司翁は発電所建設中に、環翠楼電気部に入社し、以来六十余年発電所、変電所その他の諸設備を担当しておりますが、無事故産業協力者ととて、県や地方諸団体は云ふに及ばず、通産大臣賞、運輸大臣賞、厚生大臣賞を受賞し、ついに内閣総理大臣賞、（大平正芳）の表彰を受けており、この説明書の証言者とも云へる人です。

翁の懐古談によれば、環翠楼は前小田原市長鈴木十郎氏の長兄鈴木英雄氏、次兄梅村美誠氏の経営する旅館で、箱根で自家発電所を持っているのは環翠標と富士屋ホテルのみ（小容量のディーゼル発電機程度のものは他の旅館でも持っていた）で、環翠標の水力発電所は民間自家発電所の草業とも云へる。

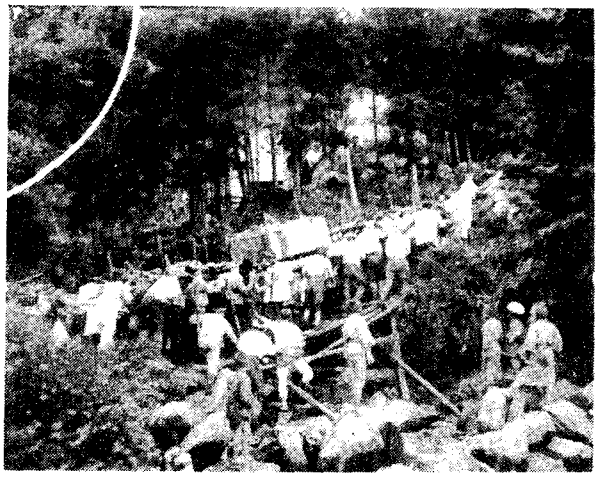
現在の発電所は昭和二十八年に、水量の問題と設備改新のため約六〇〇米程下の須雲川本流に移設したが当初の発電所は須雲川支流の滝沢の山中にあって、機械や資材はすべて人力で担ぎ上げた、発電機を運ぶ時なぞはまるでお祭りさわぎだった。

この発電所工事で忘れられない功労者の一人に小田原唐人町（浜町）の請負主井上徳蔵氏がおる。大工、石工、鍛冶屋、トビ職、土方と多勢の職人を使っていたが、当時の職人は皆一芸に秀でているので、職人どうしよくいさかいを起す、これ等を取りまとめ、異状とも云へる情熱をもって、企業主梅村美誠氏と共に山中をかけ巡ぐっている姿が今でも眼に浮んで来ます。

大正十一年完成しての喜びも束の間、大正十二年の関東大震災で水圧管の破烈電柱の倒れ等の被害復旧を筆頭に、以来今日に至るまで、風水害や鳥害、（カラスの巣作りやキツツキの電柱穴あけ）樹木の伐採等、いろ／＼苦労しましたが、この発電所の電力で環翠標の電灯のみならず、余力を町に供給し町の発展のためになったこと、特に戦時中は国に提供、戦後は箱根開発に寄与したことを誇りと思っております。

現在は東京電力に発電した電力を売り、環翠標で使用する電力を東京電力から買っておりつく／＼時代の流れを感じます。

翁の思い出話し、苦心談はまだ／＼色々とありますが、電気の専門のことが多いので、割愛いたします。



機械運搬の光景

五十八年度事業計画案

十一月　木曽路めぐりと日本ライン下り　一泊二日

一月　初詣（総持寺三渓園日帰り）

二月　講演会

三月　東京世田ヶ谷方面史跡めぐり

以上の様に五月六月の理事会で計画が出来ましたが実行に付いては尚前月の理事会で再度検討をして実行致しますので多数御参加下さいます様御願ひ致します